

諸言

昭和二十九年十月一日、歴史的な町村合併による白鷹町の誕生と共に、郷土史研究会が発足して二十年。其の間『荒砥町詩』をはじめ各村史を次々に完成して、比処に初期の目的である『白鷹町史』が遂に集大成されたことは、感慨に堪えない。

無土器時代から現代迄の生きた歴史を、専門家の手をわずらわさないで、会員相互に励まし合い助け合って、當に足と汗で綴ったことに深い意義がある。文献をあさり、口碑、伝説を解釈し、現地に文化財を調べての二十年であった。その間に物故された会員も数多くあつたが、その意志を脈々と伝えての完成である。何にも勝る記念碑であり、不朽の財産である。

我が町は中央街道からはずれた位置にあり、遙かむかしから置賜群の最北端であつた。それにもかかわらず文化的伝統が色濃く、文化の地方山塊などと伝わってきた。

朝日連峰を背景に、東北の一角には白鷹山が悠然と聳え、町の中心を最上川が北進する緑豊かな環境にある。最上川は、すべての時代の様相を眺め流れて来たが、我が町には幾千年

の昔、縄文人が活躍し、武士が政権を掌握するようになってからは、長井氏、伊達氏、蒲生氏、上杉氏と受け継がれて来た。明治二十二年になって、二三の村がそれぞれ合併し、蚕桑村、鮎貝村、荒砥村、白鷹村、東根村となり、翌二十三年には荒砥村が町となり、二十五年に十王が独立して村となった。このような行政区の変遷の中にも、我々の祖先はたくましく生き、現在の町を創り育てて来た。

今日山形市や米沢市には一時間足らずで行けるようになって、文化の交流は頻繁になり、混合文化を呈するであろうが、我等が先祖の足跡を噛みしめて、我が風土の特色を生かし続けたいと思う。

比処に記念すべき『白鷹町史』の刊行に当り、編纂に努力された委員各位、及び資料を心よく提供された各位、そして御指導御支援を賜わった各位に深い敬意と感謝を表するものである。

昭和五十二年一月

白鷹町長 菊地秀夫